

---

## はじめに

藤田 佳久

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長



昨年5月、愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、文部科学省による「オープン・リサーチ・センター」のプロジェクトに選定されました。

愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、愛知大学の前身校ともいべき東亜同文書院大学（1901～1945、中国上海に設置）の卒業生を中心にした寄付金により1991年設けられた東亜同文書院記念基金の誕生を契機にして愛知大学内に1993年に開設されました。折から書院卒業生である山田順造氏が、父であり孫文の秘書役を務めた山田純三郎氏の孫文関係コレクションを本学へ寄贈されたこともあり、特徴ある記念センターとして世に出ることになりました。しかし、こうして開設された記念センターではありましたが、学内的にはもっぱらそれらの孫文関係コレクションや書院史の展示機能だけが認められ、『記念報』（2006年度で第15号）を刊行し、時に講演会を催したものの、研究機能は認められていませんでした。

それがこのたび「オープン・リサーチ・センター」として選定されたことにより、以降5ヵ年計画として（1）東亜同文書院に関する総合的研究や（2）それにかかわる愛知大学史研究、さらに（3）所蔵史資料のデータベース化と公開、（4）国際的・国内的シンポジウムの開催、（5）講演会・研究会の開催、（6）展示施設の整備、などが一気にすすむことになりました。

このプロジェクトは2006年5月に選定されたとはいえ、第1年目の具体的・実際の事業展開は夏休み明けからがスタートとなりました。その直前には書院25期生（1925年入学）で、ちょうど100歳を迎えられた安澤隆雄氏による講演を実施し、「オープン・リサーチ・センター」の幕明けにふさわしい企画となりました。

その後、11月にはパシフィコ横浜の大ホールで毎年開催されるようになった図書館総合展に、愛知大学60周年記念と、その記念事業であるオンデマンド方式による書院生各期の大旅行誌の出版を重ねて、「東亜同文書院から愛知大学へ」というテーマで出展いたしました。この図書館総合展に大学が出展したのは初めてのケースで、好評を博し、主催者側からも感謝されました。同時に3人の講演者によるフォーラムも開催し、会場は満杯となりました。関東地区で愛知大学を前面に出した展示は初めてでありましたが、東亜同文書院の実像を広く知ってもらふ展示もまた初めてでありました。

また、東亜同文書院を継承した愛知大学開設時の状況を示す展示施設の整備も、ほぼ1年目の計画を実現させ、それとあわせたブックレットも学内の教職員や学生だけでなく、広く地域住民の方々の手にも届けられ、当記念センターの公開の役割を果たしました。

そのほか、東亜同文書院と関係する愛知大学史関係の事業では、世界の中での視点としての大学

---

史のシンポジウムや本間学長ら書院とかかわる人物史に関する講演会や研究会を開催し、その一部はブックレットとして出版しました。

以上のような経過をふまえ、それらの成果とともに、若手研究者（ポスト・ドクターやリサーチ・アシスタント）による東亜同文書院関係の研究報告も数編加えることで、ここに2006年度の『愛知大学東亜同文書院大学記念センター・オープン・リサーチ・センター年報』第1号を発刊することができました。当事業の選定期間もあって、実質的には半年間の成果ではありますが、記念センターが「オープン・リサーチ・センター」としての選定を正面から受け止め、その目的に向かって努力した成果をここに示すことができたことをうれしく思っています。

1年目の諸事業を通じて、新たな発見や展望、課題も浮かびあがってきました。これらは2年目以降の発展につなげるよい契機となるに違いないと確信しています。

まずは、2006年度版年報の刊行にあたり、ごあいさつとさせていただきます。

2007. 3. 31